



～特集～

THE 極み「大村先生に聞く新型コロナとの向き合い方」

目次

- ◇名盤探検隊 3p2
- ◇美味な話③p3
- ◇シネマ滝③p4
- ◇THE 極みp5
- ◇編集後記p8

『名盤探検隊3』

「パサディナパーク」ハイファイセット（1984年2月発売）

パッとこのタイトルを見て、よく分からないと思う方がほとんどだと思う。だけど「翼をください」という曲を口ずさめる方は多いと思う。その曲を歌っていたフォークグループが赤い鳥。そのグループが、ふたつに分かれた。

ひとつは、きっと誰もが聞けば分かる「冬がくる前に」を歌っていた、紙ふうせんという男女のデュオ。そしてもうひとつが、このハイファイセットという男性二人と女性一人のユニット。ハイファイセットというユニット名は、レーベルの社員から募集して一番オシャレだったネーミングを採用したらしい。75年の事だ。デビュー曲はユーミンが作詞作曲した「卒業写真」。そこから、ユーミンの曲や洋楽のカバーを歌っていた。

「フィーリング」という曲では、紅白にも出場している。その頃、制作されていたアルバムは、ジャズっぽくマニアックなものだった。

それが、ハイファイセットになって10年後、レーベルを移籍し、それまでの音楽性をガラリと変え、ポップなアルバムを制作していく事になる。

その第一弾が、この「パサディナパーク」だ。

「ジャケ買い」という言葉があるが、このアルバムのジャケットはただの植物のイラストなのに、その色合いが好きで今でも買って部屋に飾りたい程好きである。

84年当時は、LPが主流だった。その素敵な色合いのジャケットからレコード盤を取り出しターンテーブルに置き、針を落とすと流れてくるのは1曲目の「水色のワゴン」。間奏のハーモニカが印象的な曲で、本当に滝は好きだ。

ある日、夏の高速を走っていると、故郷のナンバーの車を見付ける。そこから初恋や卒業などの思い出が一気に駆け巡り生まれた街の風を感じるという曲。

そして「7月のクリスマス」という曲は、カップルが砂浜に寝転びながら会話をしている風景を歌っている。付き合ってから5年になる二人。照れくさそうな彼に彼女が「もう5年ね、早いものね」という。けれど彼は照れて話を逸らす。でも最後に「言い忘れていたよ。さっき、もうじゃなくて、たった5年さ」と言い放ち、彼女を大切にしていると感じられる。滝は、この男心が、ものすごく分かる。

この作品はもちろんCD化されているが、今は生産されていない。アマゾンで中古だったら入手できる。もし、興味持ってくれた方がいたら探してみたい。



美味な話③ 『沼津魚がし鮓』

滝は、魚より肉の方が断然好きである。だが、この店のマグロ丼は本当に好きで、今こうして書いていているだけで、お腹がすいて仕方がない。

静岡駅の中には、何故かこの店が3店舗もある（10月には、更にもう1店舗増えるらしい）。そんなに大きな駅でもないのに、何故こんなに同じ店があるのだろうか。謎である。

滝は、静岡によく行く。新横浜から新幹線に乗り40分程で静岡へ。そこから路線バスに乗り、10分で温泉に着く。温泉には1時間入り、また静岡駅へ。駅に着くと、生ビールを飲み、この店のどんぶりを食べて帰る。滞在時間わずか3時間半の旅だが、大好きな一日だ。

何故、滝がこんなに静岡が好きなのか。

それは、今から30年前の秋口、職場の先輩から、「静岡で障害者の集会でグループホームの分科会に呼ばれている。オレは一日目、用事があってどうしても行かない。そこで滝、オレも後から行くから、先に行って話してきてくれないか」と言われ、行くことになった。

集会が終わった日の夜、先輩が半月前に知り合った人の部屋に泊まった。

男三人、飲み会が始まった。先輩はすぐに酔いつぶれて寝てしまい、部屋の主と滝だけの酒盛りになった。そこで、月に一度泊りに来る友人の話をした。

「オレの友達は、エロビテオとトイレットペーパーを持って泊りに来るんだよね」と。こんな面白くもない話が、アルコールの力もあってか、ものすごくウケた。

そして25年間、友達になれた。

その後、滝も2年間、静岡に住んで働いていたこともあり、滝にとって静岡は青春の街なのだ。

ふむ、「25年間、友達になれた」と書いたけれど、この表現、なんかおかしい。実は彼は、脊椎にバイ菌が入り、12年間苦しんだ末、今から5年前に49歳という若さで亡くなったのだ。

今でも、静岡の街をバスで走るたびに彼のことを思い出す。

この沼津魚がし鮓は、とにかくおいしい。横浜ランドマークタワーの5階にもあるので是非。滝のおすすめです。



『シネマ滝』③「チルソクの夏」(2004年5月公開)



2002年7月7日、山口県下関市で韓国の高校生との交流陸上大会が行われた。バブル崩壊の影響で10年間停止していたこの大会を再開出来たのは、郁子という42歳の女性の頑張りがあったからだ。本作品は、その郁子の青春時代を回想していくものになっている。

1977年7月、韓国で下関の高校生との陸上大会が行われた。当時、郁子は17歳。韓国に着くなり迎えに出ていた高校生に一目惚れする。相手も同じ思いで、七夕の夜には、宿舎を抜け出し、二人で夜空にかかる天の川を見る。そして一年後、今度は下関で天の川を見ようと約束し、文通を始める。

それから郁子は、三人の親友たちと陸上に励み、青春を謳歌していく。友達の家泊まりに行ったり、初詣に行ったり、アルバイトの新聞配達をしたり、そんな日々の中で彼との文通は続けていく。だけど周り達の大人は、韓国との彼との関係を快く思っていない。

彼の方は、もっと厳しい中にいた。日本の音楽を聞いていても、消されるし、母親から郁子へ「息子は、あなたからの手紙に迷惑しています」と嘘の手紙を書かれたり。そんな1年を乗り越え、二人は再会する。

再会はもちろん、熱いものだがここでは説明は省く、ただ、交流会のシーンで韓国人の彼がイルカの「なごり雪」を歌いだす。すると周りの大人達が必死に止めるというシーンがある。これは何故なんだろう。

最後に4年後の再会を約束し、別れるがこの約束は、これは叶う事はなかった。

そして25年後、陸上大会をやり終えた郁子。「25年前の思い出が自分の中でキラキラしている事がうれしいの」と心の中でつぶやきながら、スタンド裏を歩いていく。すると42歳になった彼が「なごり雪」を歌っている。これがラストシーンだ。

滝と一緒に、この映画を味わって頂きたい。中古でもレンタルでも配信でも是非チェックしてみてください。

【独り言】

15年前に観たこの作品、滝はてっきり高校生のラブストーリーだと思っていた。ところが、この記事を書くために見直してみたら、とんでもなく奥深い問題があった。それは日韓問題である。映画を観ながら「何が原因なんだろう？」と思いながら観ていた。舞台は70年代後期、その時代でも人々の心の中には、植民地の事や戦争の事があったのだろうか。滝にはわからない。

『～THE極み～』

今回の「極み」は、新型コロナウイルスの事を詳しく伺いたいと思い、滝の主治医、「かえでの風さがみ」の大村先生にお話を聞く事ができた。さて、どんなお話が伺えるのか。

【何故、お医者さんになったのですか】

大村：身内に医者がいなかったから医者になろうと思ったのです。小さい頃から大人をよく見ていて「大人のこういうところが嫌だな」とか思う事があったんです。兄が小児ぜんそくで、よく病院に付き添いで行ってたんですけど、その時の小児科の先生がなんか偉そうな態度をとっていて「なんか嫌だな」と、自分の両親が病気になった時、信頼して診てもらえるお医者さんがいないなあとあって「それじゃあ、僕が医者になろう」と思って、医者になりました。

訪問診療「かえでの風」に来たのは、今年の4月からで、その前は、メインは救急でしたね。10年ぐらいかな。

滝：救急って、ものすごく大変だったでしょ。

大村：そういうイメージありますよね。たしかに大変なんですけど、救急って、なんでも診ないといけない。僕は色々興味があって専門が決められなくて、頭の事もお腹の事も、ケガの事も、なんでも診たいから救急に進んだんですけど、訪問診療は、週に一回、研究日というのがあって、これも10年ぐらい。メインでは救急をやりつつ、訪問診療も定期的にやっていた。訪問診療も色々な病気の方がいて、なんでも診ないといけなくて、ここで救急の知識とか経験が役に立った。訪問診療って患者さんを継続して診ていく。救急って、わりと外来だけで済んでしまう。入院しても最後まで診るということがあまりなくて、重傷な方が一命を取り留めて、家に帰れるようになりハビリして、ある程度で転院されるんですね。私は最後まで診たいんだけど、そうしていると、どんどん患者さんが増えてしまうので、どうしても継続して診ることが出来なかった。訪問診療は、長い間診ることができて、すごくやりがいがあって、救急のスキルも生かせるし、ここにきて訪問診療をメインにして、時々救急もやっています。今日も行ってきたんですけど。

【もう少し、救急での話を聞かせてもらえませんか】

大村：病院で救急車を待つだけではなく、現場に駆けつけるDMATという役割もある。山道でバイクで転んで大怪我をした人などが、救急車で病院まで来るとすごく時間がかかるから、途中の開けた所まで救急車で行って、そこからヘリで現場まで患者さんをキャッチして病院まで来るということがある。それでも時間がかかるから、コードブルーの山Pのように、ヘリが病院まで来て医者に乗せて、その現場まで行って、僕らが出来る応急処置をして、そこから病院に行くということがたまにあるんですよ。東京消防庁がドクターヘリを持っているんです。あとは、交通事故で車に挟まれて出られなくなって、そこまで駆けつけたということも何回かありました。そういう場面では、怖い思いを実は私はしたことがなくて、大体、着いた瞬間に軽症でホッとするということが多かった。

病院にも様々な人がいて、僕が一番印象に残っているのは、救急にいちばん最初に入ってペーパーだった時に、先輩と一緒に当直で、夜すごく大変で全然眠れなくて、明け方4

時から5時頃に、救急車でおじいさんが運ばれて、意識がなくて、なんだかボーとしている。ただ寝ているだけではないぞ、みたいな雰囲気はあった。頭の中の出血かなにかがあるだろうという事で、CTを撮ってみたら頭の中に血のかたまりがすごく溜まっていて「これは大変だ」と手術するという事になった。そうこうしているうちにドバッと血を吐いた。これはどっちも治さないと助けられないということで、救急外来で、頭を開けつつ、内視鏡の手術を同時にやったという事があった。それが僕の最初の内視鏡手術だったんですけど、普通の内視鏡手術とは違って、整った状態でやれなかったの、変な格好でやったから、なかなか出来なくて、先輩に手伝ってもらいながら、ということはありません。

朝、出勤して夕方まで、これが普通の働き方ですよ。その後、担当の日はそのまま泊まって診る。そこから更に、翌日も日勤で同じように働くということも昔はありました。だから40時間ぐらい、場合によっては、その次の日に、別の病院に行く事もあった。だから家に帰れるのは月の半分ぐらいというのはありました。段々、働き方改革で、少しずつ変わってきてはいますけれど、どうしてもマンパワー的にうまくいかないことがあるから、どこかで犠牲を払っていかないと。

【新型コロナウイルスについて】

大村：コロナウイルスって分からない事ばかりですよ。そして色々な情報がありますよね。あり過ぎるぐらい。だからあんまり焦ってはいけないと思うんですね。マスコミが慎重になり過ぎるなと思う時もある。色々な情報を鵜呑みにしないで、「私は、こうなんじゃないかと思う」とか、自分なりの見方でいいと思う。今日もコロナの報道で、無症状でも後遺症が出る人がいるというものがあつたけれど、果たしてどのぐらいの割合なのか分からないし、そこだけ取り上げられると怖くなってしまふから、見解が難しいですよ。

滝：これからどうなっていくのでしょうか

大村：病院で働いている者としても、あまり恐れ過ぎずに、コロナって分からない事ばかりだけど、徐々に分かってきている事もあるから、今では普通になっているインフルエンザとかノロウイルス、ああいうのも病院でワッと流行ったりするけれど、段々医療関係者が慣れてきて、毎年冬になると流行るものだと分かっているからうまく付き合っている。コロナウイルスもそんなふうによく付き合っていけるようになると思いますけどね。

【映画がお好きなようなので、映画のお話を】

大村：若い頃は、シャレこいて邦画を観ていました。それも単館系のなんだか内容が分かりにくくて、観終わった後にスッキリしない。そんなのばかり観ていました。

滝：この近くに、単館の映画館ってありましたっけ。

大村：この近くはわかりません。当時は、渋谷とか新宿に行って、やっているのを観ていました。あとは普通にDVDをレンタルして観ていました。でも結局、段々、分かりやすくしてスッキリする映画が観ていて気持ちよくなるようになってきました。若い頃は、そういう映画を観ていました。

滝：一番、最近、観た映画は。

大村：去年、子供達と観に行ったんですけど、仮面ライダー。平成最後の仮面ライダーで、大人もすごく楽しめる内容で、「仮面ライダー」(とんねるずのノリさん)が出てきたり、クライマックスはラスボスが持っている謎の板に歴代の仮面ライダーが、ライダーキックを連打する。

最後に「平成」という字が浮かんで来て、まるで平成おじさん（小
淵恵三さん）と同じポーズで悪役が爆発していく。大人達だけが大笑して、子供達はニ
ッコニコしていました。なかなか面白かったですよ。

【これからの夢は】

大村：今、仕事もやりがいがあって楽しいし、子育ても忙しい。僕は目標を立ててやるタイプじ
ゃなくて、その時々で決めてやっていくので、目標というものが思い浮かばないですね。

滝：やっぱり、続けていくという事が大切ですよ。



編集後記

滝は、ごはんの上に焼いた秋刀魚を大根おろしと醤油をグチャグチャに混ぜて食べるのが大好きである。ところがその秋刀魚が水揚げが悪く高級品になってしまったとか。これは、海水温上昇の影響になのか、またコロナが影響しているとも聞いたような気がする。秋の味覚がひとつ食べられなくなった。今まで当たり前だと思っていた事がそうではなくなっていく。今年はその連続だった。

さて、今回のナイアガラタイムスは、今までよりもちょっと薄め、けれど「とにかく定期的に発行していく事が大切」だと思い作ってみました。でも出来あがってみると案外読み応えがあるものになったかと思っています。

そして、「THE～極み～」の取材に協力して下さった、訪問診療「かえでの風さがみ」の大村先生、本当にありがとうございました。

何ヵ月か前に、ラジオで「どう伝えていくかは、どう生きていくかという事だ」と言っていた。滝はこの言葉に感銘を受け、一日一日を素直に一生懸命生きていこうと思った。これからも決してうまいとは言えない文章ですが、お付き合い下さい。

発行所 相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝 英史

メール：nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

☎ 0 4 2 (7 5 5) 9 1 0 5

発行協力 社会福祉法人 「アトリエ」一から百まで堂

神奈川県相模原市中央区相生 4-13-5

振込先：ゆうちょ銀行〇二九(029)店 当座 0073443

記号番号 00250-4-73443

社会福祉法人アトリエ